

# 綱光公記

——文安六年（宝徳元年）四月～八月記——

遠藤 須田 桃  
藤 中田 崎  
珠 牧 奈  
紀 子 保 郎

はじめに

『東京大学史料編纂所紀要』二〇号～二五号では広橋綱光（一四三二—一七七）の文安三年（一四四六）から応仁元年（一四六七）の暦記の翻刻を行い、二五号までで現在確認できた暦記の紹介を終えた。そこで二六号より再び時代をさかのぼり、綱光の記した日次記の紹介を行ってみたい。今号では文安六年（宝徳元年、一四四九）四月～八月記を取り上げる。本記の概略については二〇号を参照して頂きたい。

この年の将軍は足利義政、天皇は後花園天皇。綱光は一九歳、右兵衛佐で、正月に正五位上に叙された。広橋家の当主として本格的な出仕を開始した時期である。日記からも、儀式の細かな作法を記そうという意志や、祖父兼宣の日記の目録を取るなど、朝儀の勉強に励んでいる様子が窺える。またこの年九月には、室撰津満親女との間に長男兼頭が誕生した。

主な内容を見る。四月一〇日から地震の記事が頻出する。四月一二日には大地震が起り、「諸家築地門等類損、東山以下摧地垢、人々少々死」

すような事態となった。嵯峨釈迦堂の仏像が倒れたことも見える。その後も余震は続き、四月二十七日に伊勢神宮に奉幣使が遣わされた。しかしなおも止まず、六月四日、七月一九日などにも「大地震」が発生した。幕府では四月一四日に管領細川勝元が従四位下武藏守となる。続いて一六日に将軍義政が元服した。その詳細は「別記」に書かれたが、現在のその「別記」は確認できない。同二十七日、評定始・御判始が行われ、二九日には義政に将軍宣下・禁色宣下が下された。さらに八月には四位参議、左近衛中将に昇った。この任官は当初八月一六日が予定されていたが、義政の父足利義教の室正親町三条尹子の死去により、二七日に行われた。同日、鎌倉公方足利成氏も従五位上に叙され、左馬頭に任じられている。次に書誌情報についてまとめる。自筆本は国立歴史民俗博物館蔵『綱光公記』（H六三—六五九、六六〇）のほか、東京理科大学近代科学資料館下浦文庫蔵『具註暦 仮名暦』（下〇〇〇一）に六月一二日～一四日条が含まれる。

国立歴史民俗博物館所蔵自筆本は三月一日～六月一〇日条（同H六三—六五九）、七月一日～九月二六日条（同H六三—六六〇）の二巻である。

三月一日～六月一日は文安五年の間明一行の具注暦の序正月一日～五月二〇日部分、および永和四年の間明なしの具注暦を翻して記されている。題箋には「綱光公記自宝徳元年三月一日至六月十日（尾欠）」自筆本 一卷『綴合改めたる通り』とある。七月一日～九月二六日条は永享七年の間明なしの具注暦及び書状や草案を翻して記されている。題箋には「綱光公記自宝徳元年七月一日至九月廿六日（尾欠）」自筆本 一卷とある。

東京理科大学近代科学資料館『具注暦 仮名暦』は、中世の具注暦・仮名暦の断簡を集めて成巻したものである。これらの暦は広橋家歴代の暦記、日次記紙背から脱落したものであり、綱光公記の断簡数点も含まれる。宝徳元年六月二日～一四日条は第九紙として貼りつがれ、紙背は宝徳元年三月一四日～一七日の具注暦である。なお『具注暦 仮名暦』、および年次比定については、尾上陽介「東京理科大学近代科学資料館所蔵『具注暦 仮名暦』について」（『東京大学史料編纂所研究紀要』一八、二〇〇八年）で詳しく検討されている。

末尾になるが調査・翻刻を御許可下さった国立歴史民俗博物館・東京理科大学に深謝申し上げる。

【付記】本稿は「中世後期古記録の史料学的研究」（若手研究B 研究代表遠藤珠紀）、「流鏑馬の起源・成立過程の実証的再検討―鎌倉幕府儀礼の源流と東アジア文化―」（若手研究B 研究代表者桃崎有一郎）の研究成果の一部である。

#### 【凡例】

- ・翻刻に当たり文書の貼り継ぎがなされていたり、異筆の場合は、「」で括って示した。
- ・文字はおおむね現時通用の字体に改め、改行は原則として追い込みとした。傍書・挿入箇所も適宜本文中に追い込みとした。
- ・本文には読点および並列点を加えた。尊敬を表す闕字は適宜存した。
- ・欠損の箇所はおよその字数を計って□または□で示した。抹消された文字は左傍に、を付し、判読不能の塗抹文字は、およその字数を計って■または■とした。判読不能の文字は☒で示した。また残画により文字が推定できる場合は、その文字を□の中に示した。
- ・本文中で校訂により改められるべき文字や加えられるべき文字は「（」、人名注など参考のためのものは「（」に入れ傍に記した。なお人名注は現在通用する家名および名を用い、各月の初出時に示した（例えば室町殿は足利三春あるいは義成でなく義政とした）。入道した者については、まず法名を示し、続いて俗名を示した。
- ・東京理科大学近代科学資料館蔵『具注暦 仮名暦』を底本とする部分は「」で括り、符号(具)を付した。
- ・その他、適宜○を付して注記を示した。

(文安六年)

四月

一日、雨下、純陽吉兆一段幸甚、早旦參(足利義政)室町殿如例、毎々珍重、

入夜參内、平座申沙汰也、上卿三条中納言、弁不參、少納言為賢朝臣、

先上卿着陣、與、仰々詞、(不出給、マ、ニ行へ)此時帶劔引裾、退之時、(右)上卿移召

官人、(二)次召史、宜陽殿裝束事歟、(依弁)上卿立陣、御裝束事具之後、

上卿着端座、少納言着座、献盃一献、次見參目六、上卿召史、次上卿立

軒庫下、(儀、雨)予出逢、上卿拔笏取杖、予給、上卿拔笏目之後、予堂上付内

侍奏聞、則被返下之時、見參等杖下取合テ返下上卿、々々拔笏目之後退、

上卿又帰陣、少納言見參目六共以下之歟、予装束、

白襲、(白下重、同裾、白帷、白引、部木、袍如何、持鬘扇)

御盃拜領之後退出、(万里小路冬房)

二日、晴、祈年祭也、奉行頭右中弁未拜賀之間、当日之事可申沙汰之由

被仰下、仍着白襲所參也、上卿帥大納言、弁不參云々、本官弁代少納言

參云々、陣之儀事具後上卿着陣、與、(正親町三条美雅)仰詞、(可被免遣祈年祭、日時令定申)上卿微唯後退、

方(右)次移端座、召官人、二声、又召官人、召史、仰勘文事歟、史入蓋參進、

見了史退後召官人、招職事勘文奏聞、則被返下上卿、覽了召御覽シツ、

上卿微唯之後廻左退、上卿召史給勘文、上卿退出、予昨日出立同之、

十日、晴、入夜大地震、驚存者也、終夜猶動、

十一日、晴、昼夜不斷大地震、為之如何、

十二日、晴、天明以後大地震、此一兩日大一也、諸家築(地)門等頽損、東

山以下山摧地坼、人々少々死、將軍塚不斷鳴、如雷、以外也、猶不斷也、

何不被行御祈哉、驚無極、天下怪異也、珍事、可恐、嵯峨尺廬

堂仏像仆給之由聞、為之如何、先公御月忌、僧七人供養、前七個日初之、

如例事如形、瑞雲院參、

十九日、晴、春日飛蟻出現、驚無極、御下等事可申沙汰由、南都伝奏奉

書如此、雖然、条々一身身申沙汰之間、故障申了、是僕不合期儀也、

追申、

社解如此候也、上卿可為四条大納言候也、(隆夏)

春日社飛蟻事、可令勘例行御下之由、可被宣下之旨被仰下之状如件、

四月九日、(花押)

藏人佐殿、(廣橋綱光)

二社解案、(貼紙)文安六年春日社、(端裏書)

可御下申沙汰之由被仰下、雖然条々申沙汰之間故障了、上卿四条大納

言也、

春日社司等言上、

事由、

右、今日未初点、当社一御殿東裏松伐杭并御後備殿南壇下中社榎・本社

壇下松伐杭、以上三个所同時飛蟻出現、仍註進言上如件、

文安六年卯月八日、(中臣)執行正預祐憲、(天中臣)

十三日、晴、午刻以後雨下、今日敷政門院御一廻、於安樂光院可有御經

供養、余申沙汰也、委有別記、猶地震、(庭田経女幸子、後花園天皇母、文安五年四月二三日没)

十四日、雨下、後瑞雲院殿御月忌如例、兼又管領細川、任武藏守、同四品、

同典厩転任右馬頭、同弥九郎任右馬助、是御元服御吉例云々、武州頼之

之御例也、仍而御執奏之間早申沙汰也、但於典厩者法鉢之間、嘉吉三年六

月五日日付分可申沙汰之由被仰下之間、其時職事左大弁參議俊秀仰了、

管領今從五位下也、直叙四品事無例之間、為之如何、雖然武家事之間、

正五位下と書之、且々故一条殿御指南云々、職事故実也、官位共申時、

為位本事、是又職事故実也、注左、委見口、宣箱、

文安六年四月十四日 宣旨

正五位下源朝臣勝元

宜叙従四位下、

藏人右

同 同 同

武藏守右京大夫源勝元朝臣

宜任武藏守、

藏人

同 同 同

源成賢

宜任右馬助、

藏人

以上上卿久我大納言付了、

嘉吉三年六月五日 宣旨

右馬助源朝臣

宜転任右馬頭、

藏人權右少弁藤原俊秀奉

今朝猶地震、為之如何、

十五日、晴、地震時々有之、

十六日、地震、武家御元服、委有別記、

天晴風靜、猶々今日儀珍重、抑依無所役、当番間 禁裏祇候、自二

条被仰下云、今少路殿今夜令遂首服云々、代々武家御猶子分云々、仍而

御名字を賜、然而成冬云々、宣下兩条被申、正下五位事・禁色宣下事也、

直叙加叙事以外事也、更々不可有事歟由、兩条処、又被仰下云、彼仁代々

如此、且見勘例由被仰下問、則披露処、此上者可宣下由被仰下、同宣下

了、且今夕間先進口 宣者也、禁色宣下事、一兩年断間、是又不可然事也、  
(二条兼良) 閔白内々申入処、尤不可然令申由被仰者也、彼奉書勘例次加者也、

猶尋可知、二条殿事子細重可申入者也、莫言、

成冬加叙事、代二度、文安六

彼叙品事、代々直申正下五位候、且兩度例如此候、於一官者後日可被

申候、可然様得意可有申御沙汰之由、内々可申旨候、恐々謹言、

卯月十六日

直叙正下勘例 文安六

應永十一年三月廿六日、藤原師冬卿息元服、名字滿冬、叙品、正五位禁

色事以口 宣被宣下、是北山入道准后御猶子契約之故云々、

同廿六年十二月五日、今夜藤原持冬首服、為前内大臣御猶子之儀、正

五位下左少将・禁色事被宣下之、非陣儀、

十七日、猶地震、

十九日、猶地震、

廿日、雨下、地震時々猶有之、為之如何、

廿一日、陰、地震、南都慈恩院・修南院以下、一乘院・松林院等、十九日

夕上洛、是 室町殿御元服御礼、慈・修兩院御輕服之間不令參給、万内

仰置云々、今朝下向、

廿二日、地震、

廿三日、地震、

廿四日、

廿五日、地震、

廿六日、同、

廿七日、晴、今日依地震被発遣伊勢一社奉幣申沙汰所也、自武家劔、

御馬、外宮・内宮被進、条々如例、上卿北畠大納言、弁冬房朝臣、出車

雅保、用却〔要脚〕悉昨日納云々、先上卿着陣、與、予仰々詞、其様、依地震怪異可被發遣伊勢一社奉幣日時定上卿称唯、次上卿着端座、召官人、此外如例、奥座にて仰々詞時、退之時廻右不懸膝、參議座末昇、自上卿查当端、又出納存知、内蔵寮請

奏下上卿時、端、退時廻左、請奏ハ日時勘文奏聞後被返下、上卿撤後廳下、上卿召弁下、弁下史了、此外官方請奏有之、是於神祇官入也、不令人職

事也、陣儀事終上卿着弓場、宣命草・清書二度付予奏聞、予付内侍奏聞、如則返下上卿、此時御覽シテ上卿向本官、弁同之、每々如例、頃之小舍人示伊

勢幣發遣之由、是申、宸儀出御、頭卿不祇問、御笏予進之、御裝束儀如例、藏人道任一人祇候、今度条々申沙汰間不便之間、度々故障〔中〕了、雖

然御事闕之由被仰下問、所申沙汰也、武家別而御願也、猶致今日地震、〔直〕室町殿上様自伊勢還御、少依御所勞御下向遲々云々、驚存者也、然而早々

御城之由承問、珍重〔減〕無極、近比今度御大飯云々、猶雖可有記置事無益、莫言〔評力〕及深更還御、大宮御庵御共御參、宮、珍重、

廿七日、晴、「抑今日、定初云々、珍重、自今天下治善路世立帰条、一身先以欲悦〔挿入ナル〕、」猶地震、兩三度、

廿九日、夕立雷下、地震少也、今日管領宿所渡御云々、同上様渡御、珍重、

廿九日、晴、今日〔足利義政〕左馬頭殿御事、兩条有、宣下、〔藏人〕將軍宣下也、奉行右少弁勝光、

上卿右衛門督、是鹿苑院御吉例云々、但奉行其時仲光卿申御沙汰也、今度日野弁官兼對之間如此歟、御判初同有之、例式八幡善法寺田光清〔中〕拝領

歟、人々參、予同參賀、御太刀二腰進上、人々同之、是宣下・御判兩条也、珍重、幸甚、無極、

五月

一日、晴、早旦參、〔足利義政〕室町殿、一段珍重、如例、昨日今日猶以地震、人々

參、每々可任

○此間闕、

(二十九日)

帶、參、内、帶劔雜色〔持之力〕同之、神馬左右馬寮仰遣、仍而

二進之、右馬寮〔青〕・左馬寮〔栗毛〕、是左馬寮今出川沙汰也、祈雨栗毛御馬進入事、似無放吏也言語道斷事也止雨有其謂、歟、祈雨之時黒、然而又青黒勿論

所詮不可然間、左馬寮侍者召、御馬毛可憚候哉、〔加開答〕返遣了、申云、奉行趣尤候、公人無沙汰事候、仍而川原毛御馬引進、是又不可然事歟、

雖然已云及晚、又雖仰遣猶可為同篇之間、先留了、一向寮家無沙汰珍事、莫言、大記不參間少内記祇候、官、外記同參、陣儀事具後、

上卿・弁參、秉燭之程陣之儀始行、仰詞云、〔正親町三条公綱〕為祈雨可有奉幣丹生、上卿、稱

唯後退、〔日野勝光〕上卿着端座如例、〔不審、先可直裾歟〕上卿召官人、二仰軾歟、次

又召官人、召弁、歟、仰勘文事歟、弁於障子前、史持參日時勘文、弁取之、披見之後下上卿、々々覽後弁退、次上卿召官人、〔外記〕二召史歟、仰筥蓋事、

史筥蓋持參、上卿取之、入勘文、史退、次上卿召官人、〔但堂上弁〕二聲、招職事、付内侍奏聞、被返下後下上卿、々々披見後、目予之時、予仰云、御覽シツ、

予左廻退、次召史歟、上卿下給勘文歟、次上卿召内記、仰宣命事、持宣命草、陣之儀事終着弓場、奏聞如例、神祇官請奏、弁宣命も合下上卿歟、事終退出、陣之間未程不及見隱堂上也自夜雨下、幸甚、豊年嘉瑞也、

卅日、雨下、珍重、尚申沙汰自愛、

六月小

一日、雨下、早旦參、〔足利義政〕室町殿如例、幸甚、

二日、時々雨下、雖当番頭親祇候、宿祇候了、山門訴訟間山火以外也、珍事（王御門）、

三日、晴、雨脚時々下、祇候 禁裏、晚入入晚退出、猶地震不斷、

四日、晴、地震、曉鐘程大地震、驚無極也、

五日、晴、毛詩読外、宣記目六取之、卅年以來也、（兼冥公記）

六日、晴、大館入道（満信）・同治部少輔入來、有一盞、

七日、雨下、依当番祇候 禁裏、有文談、有聯句、無祇蘭祭礼、依山訴也、風流無之、可驚也、

八日、晴、白比丘尼參御所云々、年八百歳之由申、怪異此事也、今日帰

国云々、定篇解物歟、不吉事歟、不審沙汰有条々者也、莫言、終日

宣記取目六、文書等撰之、

九日、白比丘尼御所參由、昨日有御聞き、雖然不參云々、尤以珍重、

猶々希代事也、

十日、晴、時々雨下、今日月次有和漢百顯

○此間闕、

〔十二日、晴、早日參瑞雲院、有時、恒例也、僧衆五人如例、頃之退出婦輩、

十三日、晴、誕生日也、有祈禱、

十四日、晴、後瑞雲院殿御月忌也、如例、

（七月）

一日、晴陰不定晴早日參 室町殿（足利義政）、入見參、祝着幸甚、每々可任所存

初秋也、人々御太刀進上、是御会所事初云々珍重、今日御一献之間

良久祇候、御庭以下拜見、言語道斷驚目者也、珍重、入晚祇候 内

裏、御盃拜領後退出、祝着、殊被下御帷、畏存者也、慈母御方參、（豊子女）

被下御盃、祝着、万秋可謂嘉例、幸甚、別殿參同前、万幸、今

月有改元間、無何文書引見者也、到今日猶地震、已七十五日余也、可驚

、

二日、

三日、晴、今日自權弁七夕内々御会、可令作進之由被仰下云々、題向月

穿針也、奉書如此、指而宸慈御会非職雲客申沙汰事不（貼紙）去年も此人申

沙汰如何、内々段勿論々々雖然兼職事可申沙汰歟、可尋知事也、

右題七夕内々御会可令作進給之由被仰下候也、恐々謹言、

七月二日 親長（日露寺）

藏人佐殿（広橋綱光）

四日、

五日、

六日、晴、大宮御庵草番之間、花少々進也、入晚自侍□奉書如此、明日

可花立進云々、畏存之由返答了、

七日、晴、早日奉拜尊神以下後、參 室町殿如例、御太刀人々進上、御

具足新調ゆへ歟、猶可尋、禁裏花瓶進上、昨日依被仰下也、入晚參 内、

詩可進上料也、去年付奉行、雖然清書遅々間、馳持參之間、不及付遣、

抑花立進御局 内々進上、雖然盃不存知問公方御申出、御局にて盆令

進上、依無余日也、愚作如此、不及披講也、

七夕同賦向月穿針、各分、

一字一首探得

藏人右兵衛佐藤原綱光

銀漢風生捲積陰樓頭

乍見月華臨内嬪欲

得天孫巧綵縷深穿

九竅針

(二條兼良)

内々進執柄申談者也、不及御直、抑端作様内々以御局書被下、此牀尤可然、愚意分不理也、仍而続加者也、人々詩歌拜見之後退出、今夜有御樂、所役殿上人無人、珍事く、愚袍可借進由有別勅、仍而遣永繼、仍而可參云々、可謂希代事也、

抑被置御自室町殿御絵以下三具足等被進常御座所、被置之、人々進上花瓶

御前左右被置之、誠牛女手向、驚目珍重く、

(貼紙)

(網光筆)

(貼紙)

一字一首探得韻字之内得字書也

明日草花一瓶可令獻給之由、被仰下候也、恐々謹言、

七月六日

親通

(貼紙)

(返趣)

(網光筆)

明日草花一瓶可令獻之由謹奉了、可存知仕之由、可得御意候也、恐惶謹言、

七月六日

網光

(切封墨引)

廣橋殿

親通

一日、晴、早旦參雲龍院、掃幕後、於新殿為万歳嘉例、有一獻、幸甚く、御局以下御出、

十二日、晴、早旦參瑞雲院、云御月

云淨兼三廻

旁參行施我鬼一会、

七個日之儀如例、參百万反談儀、聽聞只如夢、

三日、晴陰、雖当番、依虫腹氣不參、

四日、晴、早旦先參等持院、參瑞雲院如例、

十五日、「御祝以下如例年、於慈母御方も有御盃等、珍重く、予方又如例、幸甚く、後瑞雲院御月如例、」

(廣橋兼宣)

(十四日祭)

六日、

七日、

十八日、晴、少下、今日御靈之祭礼無為珍重く、

十九日、晴、風清、残氣此一兩日興盛、抑於内裏面々献申沙汰云々、

予人数内也、中御門大納言取沙汰者也、予百足内々進御局、付進長橋了、

午刻以後參内、先之午刻大地震、其以後連々鳴動、殊高声驚無極候者也、為之如何、一昨夜歟大地震、未数日地震不止者也、珍事く、可恐く、鳴動只如雷く、又有御会、予一首、寄衣恋、

恨てもかひやなからんころも

なみたに袖のくちはつる身にて

有御発句、夜深退出、御製云、

入夜月明也、及乱舞、御連歌

有御発句、夜深退出、御製云、

花なれや桜の木の間にほふ月

飛鳥井三位付申歟、不得聞、

廿日、晴、小地震、向細川宿所、管領職還補為賀也、太刀遣了、自其向日野町亭、

廿一日、晴、江瓜雖左道遣常徳院、

廿二日晴、夕陽時分小雨下、慶雲院御七廻也、仍而參東山慶雲院、自其

帰宅、於等持院八講堂有御経供養、委細可尋記、自右少弁勝光有信信、

北野臨時祭御教書不審事也、仰所存分返答了、夕拜抄写遣了、

廿二日、

廿三日、晴、依当番内裏祇候、入夜有御一献、御局申沙汰也、珍重く、

廿四日晴

廿三日、晴、今日日野亭新造上棟也、仍而馬代百疋遣了、向晚賀了、珍重（勝光）、御所三被下云々、

廿四日、晴、月次法葉、有和漢百韻、僧一人供養也、

廿七日、

晴、町卿入來、有夕飯、入夜御所被祇候、左京大夫等入來、廿七日御局（資忠）

御對面、終夜大酒以外令（沈）醉者也、近比女中（房）被坐（故也）也、度々有來臨、喜悅

〳〵、万幸〳〵、

廿七日、

廿八日、晴、今夜改元定也、委細注別紙、改文安六年為宝徳元年也、早

參也、

廿九日、晴、為改元御礼參、室町殿、御太刀進上、人々參賀云々、

卅日、晴、管領以下殊更八朔吉兆遣之、明日依可為物忌也、

宝徳元年八月

一日、晴、早日參

進上者也、午刻程、禁裏・仙洞以下御室等、如形所進上也、慈母御方白（足利義政）、上様（日野重子）

布一段・十帖、殊更表万歳之嘉例也、予方へ大宮御庵・女中以下被送（近衛忠綱・房嗣・教基）

種々、千秋万歳幸甚〳〵、陽明三御所・左大臣殿、同所進上者也、（撰津滿親女）

二日、晴、依例日無指事、

三日、晴、方々有侍者、又人々返殊更遣了、自柳宮被返御返、為畏申（足利義政）

參賀者也、祝着〳〵、

〔貼紙〕〔端裏書〕〔宝徳元〕

〔貼紙〕〔端裏書〕 応安六年若被行小除目候哉、任彼度例、可令申沙汰給也、

室町殿八座并御四品宣下、可為来十六日、可令申沙汰給之由、被仰下

候也、謹言、

八月三日  
藏人佐殿（広橋綱光）

親通（中山）

四日、晴、祈年穀奉幣申沙汰外無他、及晚中山宰相中将（親通）奉書到來、来十六日小除目可申沙汰云々、是室町殿御昇進參議、中将御兼任、同

御四品云々、早可令申沙汰由返答了、上卿久我大納言、是応安六年十一

月之佳例也、于時源大納言、仍而源家吉例云々、執筆権弁俊任也、仍

而左大弁宰相（功徳）圖陣也、如此申沙汰事被仰下、祝着令自愛者也、委細

有〳〵記、先例以下所尋沙汰也、

〔貼紙〕〔端裏書〕〔宝徳元〕

〔勘例〕〔宝徳元〕 〔端裏書〕八三 業忠真人 応安六年十一月廿五日小除目、上卿源大納言、親光、職事頭左中弁宣方朝臣、

執筆権弁俊任也、 大外記清原業忠（中御門）

室町殿御昇進事、応安六年十一月廿五日、入夜被行小除目、征夷將軍（足利氏滿）

左馬頭令任參議左中将（將）給、即為從四位下、又関東管領滿氏被任左馬頭

云々、此外巨細之儀無所見歟、可得御意候哉、恐惶謹言、

八月三日

兩局注進 室町殿參儀并御四品宣下奉行、（議）

五日、晴、上様被下御返、為畏入參、付女房申入者也、祝着〳〵、（中）

六日、雨下、終夜甚雨、風急、条々事沙汰外無（他）也、

七日、少雨下、風猶急、及晚風雨止、珍重〳〵、万里小路前内府三宝院（時房）

出向、内府十六日小除目事令相談者也、

九日、晴、

十日、晴、瑞春陰殿御他界云々、驚存外無他、帥大納言（正親町三条尹子）御座也、普（正親町三条尹子ノ兄）

〔院〕 光院殿寵愛御對也、御歳卅七御座云々、（足）

〔院〕 利義教

十二日、晴、御月忌如例、為訪、嵯峨二尊院出向、中納言以下對面之後（正親町三條公綱）

歸宅、淨永沙汰、神事方一日憚之者也、右大弁宰相參会、（柳原實綱）

十五日、自夜甚雨大風、為之如何、放生会延引云々、彼是驚存者也、（清恩）  
業忠真人勘例進御所問、注置候也、依御事闕、外宮行上卿右衛門督仰了、雖然故障、為後記書加了、（正親町持孝）

神宮行上卿勤祈年穀奉幣石清水使例、

右所見不詳、但承曆元年八月十五日放生会、上卿權中納言經信卿也、（源）  
件卿自承保二年行內宮遷宮事、此外行事弁參向度々例候、

祈年穀奉幣日時定上卿中納言例、

應永卅四年三月十二日被發遣祈年穀奉幣使、先於陣有日時定、上卿權

中納言通淳卿、兼行賀茂使、

大外記情原業忠（清）

正長御參 內始之時、御進物候哉、御所見候者、可有御注進之

由候也、

小除目日次事、相尋在貞候之處、注進廿七日候、其子細披露候了、雖未

及御返事候、且為御存知令申候、內々可被告仰上卿已下候哉、恐々謹言、

八月十四日

親通

十六日、晴、時々雨下、小除目延引、依瑞春院御他界云々、二七七日中

万事御略云々不及御輕服沙汰、諸家被尋仰之由有沙汰、北山准掬御例

云々、是兩局注進歟、陽明御申詞不及御輕服沙汰由御申云々、尤歟、猶

委細可尋記、來廿七日云々、悉延引由相触了、

十七日、

十八日、晴、御靈祭祀、入夜少有違乱子細云々、雖然無為由、有其間、

珍重、今朝兩社參詣者也、

十九日、晴、今日可被發遣祈年穀奉幣使、諸神使依不事行延引、可為廿

三日云々、此分悉相触了、兼又相豐入來、自三寶院被申云、若公有御座

哉、然者可申入由仰云々、雖多御座、御年少一所御喝食御座之間、旁以

御斟酌之由、御返答處、御喝食事者於當寺吉例、只可有御入室由內々可

申旨有仰云々、此上者御領狀問御歡喜、尤以可然御事也、十月可有御治

定、先內々儀云々、為御家門、旁珍重、前御弟子宝持院、去比御他

月六日（兼良）

若公御留心也真美、珍重存候也、

界白御息、間被申者也、

廿日、

廿一日、

廿二日、晴、神宮依怪被行御下、上卿右衛門督、奉行冬房朝臣申沙汰、

御下趣可載宣命由、被仰下者也、仍而先內々仰內記、神祇、陰陽勘文写

遣了、同社解遣也、

廿三日、晴參內

天晴、風和、今日被發遣祈年穀奉幣、依申沙汰、卯半刻參內、六位外記、

史祇候、出納遲參問催促處、午刻由、自極臈与奪由返答、言語道断事也、

万事如此、又陣官人遲參問極臈仰遣了、彼是以外事也、自兼日卯一点由、

何も相触了、陰陽頭有季朝臣參、事具後、上卿四条大納言、（土御門）

右大弁宰相、（柳原）資綱朝臣、內記在治朝臣參陣、右弁自夜雜熟所勞由、臨期申問、

可闕如段勿論之由返答之間、無力參陣云々、弁悉故障、大略行触由申、

其外不具云々、存外事也、然而以正曆二年五月十日例、不參分可申沙汰

由被仰下、遑近例、尤不可然事也、然而上卿以下參陣時、頭右中弁冬房

朝臣御事闕上者可構參云々、条々依遲々、巳午刻時分、陣儀始行、上卿

着輿座、次參議着橫座、予於輿座、仰々詞、（可被先遣祈年穀奉幣、日時令勘申、爰伊勢豐受太

神宮怪異異問、宣命、辭別、折宿紙一枚書之、仰詞次、自懷中取出、就

便宜上下卿、尤可書宣下歟、近代此分云々、辭別趣、豐受太神宮正殿內

〔俄〕我令動搖、并西宝殿千木經木覆左右板悉令頽落、將又先年正殿有盜賊參

昇事等、此外書注者也、上卿微唯後退、右上卿歸座、移外座召弁、仰日

時事歟、則六位史着陰陽頭座前、尋取日時勘文、於床子下弁歟、弁下上

卿、々々召外記、仰筥蓋事歟、則持參、上卿召弁、奏聞、此間予藏人方

請奏下、上卿披見、予退、右弁日時勘文返下上卿、此時神祇官請奏下歟、

上卿兩請奏下弁歟、結申退下史歟、先此間上卿例文・視等事、仰外記歟、

參議書例文如例歟、事終上卿召內記、仰 宣命事、上卿於弓場奏聞、

內記予出逢、先草、後請奏、辭別一紙置橫、則被返下、仰詞云、御覽シツ、

此時使王御馬事可被申歟、但不被申、上卿直退出、本官參、々議・弁以

下同之、內侍同參向、頃之小舍人參、伊勢幣發遣時分云々、仍而出御、

御拝儀如例、藏人追任祇候、兼案教忠九貫首不參、予獻御笏、午刻以後退出、內堅指

御笏、陣儀見及分注者也、猶可尋記、

一、今度儀、別而御執 奏、此兩三年中絶処、及此御沙汰、尤以珍重、

弥可属太平瑞相也、

一、內記四品以後參陣事難治之由、在治朝臣申之、少內記不被下御訪問

不參、是不例下行也、仍而四位內記事近代事也、雖然有例、兩局注進、

內記猶以申所存、二條兼良闕白仰云、四位內記事、近例也、其官任中上者何被存

知哉、以外事也、堅可仰含云々、仍而雖令問答猶故障間指而四位內記陣

役勤事邂逅云々其故者旧ハ無是所詮已臨期可闕如上者、先可存知、重而

可被經御沙汰由可被出奉書間、在治朝臣勤其役、以外次第也、向後四位

內記事、不可有御沙汰之由被仰者也、尤之事也、

勘例

康曆三年二月廿四日、改元、為永德元年、近衛兼朝右大臣召內記言長朝臣被仰詔

書事、言長朝臣進草、就弓場奏聞、復陣清書、又奏聞如先、次召中務輔、

大輔言長朝臣進賦、賜詔書、納退出、

一、春季、八幡神訴依不事行延引畢被行延引畢先度勅問等有而被定了条々納

公事奉行箱、当申沙汰自愛、珍重（明息）、

石清水使（隆夏）四條大納言、賀茂中御門中納言

松尾石大弁宰相平野冷泉宰相

稻荷（兼保）春日（家輔）月輪宰相、

梅宮次官北野在治朝臣

大原野次官大野同

石上同大和同

廣瀬同龍田同

住吉同日吉同

廣田同祇園同

公卿使所次官相懸、

伊勢 丹生 貴布弥（祿）

三所神祇官方沙汰之、

內侍出車、（白田）忠實朝臣、

弁冬房朝臣、

廿四日、

廿五日、

廿六日、晴、

廿七日、晴、微明着束帶參 內、小除目依申沙汰也、是 室町殿御昇進、

參議左近權中被付行小叙位、上卿久我大納言、通尚參議左大弁宰相俊秀朝臣、

上卿着陣、（端）予仰云、正五位下源義成朝臣宜兼任參議、左近衛權中將、其後自懷中小

折紙二枚取出、下上卿、雖小除目、四位參議間、先仰御四品事、然而小

折紙各別可然由、（二條兼良）執柄以下申談畢、尤雖內覽、依可遲々、予申請書写、

下上卿、參議除目・叙位書終、上卿就弓場奏聞、又上卿歸着、召外記・

内記、分給除目・叙位、事終上卿・參議・子等直參 室町殿、為賀申入也、爰被行仏眼法日中結願、自兼依蒙催、參陣輩殊所早參也、抑応安六年度聞書尋取外記披見処、任人繁多也、雖然雜任可被略之由、被仰下問、只為御一所小折紙■宸筆後日執柄進入了、

一紙、

參議源義成

左近衛權中將源義成兼

辭退、

參議藤原家輔

又一紙、

從四位下源義成

參處、大法結願未被始行程也、阿闍梨三寶院准后、頃之人々參、先公澄(正親)卷御簾、■次為賢朝臣卷曼、公卿簾外疊着座、先中御門大納言、(五卷)下紙、次久我大納言(兼通)帶、中山宰相中將、(親通)下紙、次右大弁宰相、(直衣)帶、次左大弁宰相、(直衣)帶、各着座、此時冬房朝臣仰鐘事歟、結願終而久我大納言歸座、阿闍梨引御布施、(慈光寺)一重、源定仲手長、此時忠富朝臣引御馬、予取阿闍梨裹物、御聽聞間、少蹲居退、中山宰相取裹物、引衆僧一座、次右大弁宰相同第二座、取裹物、定仲手長、其後衆僧取御布施退、阿闍梨御布施僧取之退、次阿闍梨歸座、退出、公卿以下同之、人々御太刀進上後各退出、又着直垂歸參、午刻位記・聞書等持參間、為御礼也、人々參集、頃之御対面、先度御元服之時、御的始間、今一度御太刀二腰進上、人々同之、事終而上様御方へ申入退出、任槐・相国・御極位瑞相今苗、万歳嘉祥条尤以珍重、(野)幸甚、殊相当申沙汰、令自愛者也、内記・外記砂金十兩被下歟、入夜入室町殿御馬・平鞆被進 禁裏、聽銀釵・御馬自 禁裏被進柳榮云々、珍重、(是利成氏有)入夜闍東御一官、左馬頭御叙品事、可 宣下云々、馳筆先書口 宣二枚、伝奏使書給、何被付行小除目哉、且応安御例也、可謂無念、

伝奏無沙汰歟、比興、殊子兼口入了、雖然不可有之由返答了、上卿久我大納言也、彼是珍重、御吉例勘例等、去四日記見了、

〔(貼繼紙) 応安六年度聞書案〕

參議源義成(足利)勲功賞、(瑞裏書)

治部權少輔藤原兼宣(小比叡神主)

兵部權少輔祝部成広

大藏丞藤原清貞

伊予權守安倍繁言

筑後權守惟宗広憲

左近中將藤原冬実兼

右近少將藤原冬実

左衛門尉藤原仲定

左馬頭源氏滿(足利)

応安六年十一月廿五日

正四位下藤原宣方

從四位下源義一

正五位下源氏滿

和氣房成

從五位上橘知之

辭退

參議藤原公広(清水谷)

來廿七日仏眼法結願、可令參任給之由被仰下候也、恐々謹言、

八月十九日

藏人佐殿

親通

將監藤原光俊

將監源光家

坂上教景

和氣全繼

廿八日、晴、陰、申刻、少陽時分天快晴、今日柳榮御參、(管)内始也、(足利義政)主人御衣冠、  
予束帶、右(目野)少丞束帶、(高倉)參内車御簾役、永繼束帶御劍役、予御沓役、依為  
第二上首也、駕文車、永繼同之、人々參会、無御進物、委細有別記、無  
一事違乱、無為余珍重、  
廿九日、晴、小雨下、昨日為御礼人々參、柳榮云々、予・供奉輩夜前進  
上了、抑自夜前、禁裏御不予云々、驚存間、馳參奉見処、無殊御事、御  
虫気云々、清阿弥進良葉、人々參集、入晚退出、宿祇候了、